

家族社会学セミナー

ニュースレター NO. 2

発行年月 1989年2月10日

編集・発行 家族社会学セミナー事務局

東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部正岡研究室内

TEL.03-203-4141 EXT.72-2370

第22回家族社会学セミナーに奮って参加を!

第22回家族社会学セミナーのご案内

第22回家族社会学セミナー実行委員会では、前回のセミナーの成果をふまえて、次のようなプログラムを作成し、報告等の候補者をあげて交渉中です。

第1日目は、若手研究者による報告を学会発表に近い形式で行ないます。第2日目は、現代家族に生じている現象をとりあげ、その分野ですでに研究成果をあげていらっしゃる方々に、内部体系とのかかわりに留意しながら、問題提起的な報告をお願いしています。また各報告に対しては、討論者をお願いすることにいたしました。そして第3日目には、前日までの報告と討論を踏まえて、このセミナーに古くから関わりをもっている先生方にご発言をいただき、全体討論の口火をきっていただく予定です。

テーマ「今、家族に何が起きているか」

日時：1989年7月22日(土) 13時開会

24日(月) 12時開会

場所：小田原アジアセンター

小田原市城山 4-14-1

TEL 0465-22-6131

プログラム(案)

7月22日(土) 13:30-17:00

若手研究者(5名程度)による研究報告

7月23日(日) 9:00-17:15

1.晩婚化の傾向/シングルの増加

--なぜ結婚をためらうのか?

2.子どもをめぐる病理--家族の教育

機能は低下しているか?

3.主婦の就労の増加--性別役割は変

るか?

4.離婚率の低下--離婚は増えるか?

5.高齢者世帯の増加

7月24日(月) 9:00-12:00

総括討論「今、家族に何が起きているか--家族社会学はどう答えるか」

会員の皆様には、3月に正式のプログラムと参加申込書を発想する予定です。で、ふるってご参加下さい。

(第22回実行委員長・袖井孝子)

1988年度家族社会学セミナー予算計画

家族社会学セミナー「申し合せ事項・同規則」には、予算およびその審議に関する規定がありませんが、セミナーの健全な運営のためには会計年度の当初に当該年度の予算をたてる必要だと考えられます。企画運営委員会では、その必要性を認め、総会における審議に先立ち、予算計画を立てることを了承し、さらに1988年度の子算案を以下のように編成すること決定いたしました。なお、予算は総会での審議事項といたしました。したがって、第22回家族社会学セミナーでの総会では、1988年度の子算案(事後承認)と1989年度の子算案を審議してい

たきます。

1988年度家族社会学セミナー予算案
(1988年9月1日-1989年8月31日)

ワープロ使用を前提にした版組は、まだ困難が多すぎると判断して、当面はタイプ印刷に落ち書きそうです。費用は50万-60万円程度と見込んでいます。

創刊号の内容は、当然第21回セミナー発表者の論文が中心になりますが、それに留らず、小特集を組んだほか、創刊号には無理とみていた書評欄も急きよ設定できました。ご期待下さい。

なお、第2号以降の本格的な態勢づくりの一環として、「編集・投稿規定」「執筆要項」(以上は機関誌に刷りこむ)を定めるほか、「執筆ガイド」も用意して読みやすいものにしていきたいと思えます。以上の諸点につき編集委員会から原案を出し、企画運営委員会で煮詰めています。2つの規定の原案を掲げておきましたのでご検討下さい。とりわけ、機関誌の性格づけ、自由投稿の扱い、原稿の種類と枚数などについて会員の方々からのご意見をお待ちしています。(文責・石原)

【資料】

「家族社会学研究編集・投稿規定」

(案)

- 1 本誌は家族社会学セミナーの機関誌であって、当面毎年1号を発行する。
- 2 本誌は原則として、会員の家族社会学関係の研究発表、および海外における同学者の研究の発表に当てる。
- 3 本誌に、論文、書評、研究ノートその他の欄を設ける。
- 4 本誌の編集は編集委員会によって行われ、原稿の掲載は編集委員会の決定による。
- 5 掲載する原稿には、投稿原稿と編集委員会からの依頼原稿がある。投稿原稿については編集委員会で審査を行う。
- 6 編集委員会は論文審査等のために、専門委員を委嘱することができる。
- 7 原稿は所定の「執筆要綱」に従うものとする。
- 8 執筆要綱に定められた制限枠を越え

機関誌タイトルは『
家族社会学研究』で

---編集委員会より---

「専門的学術雑誌」をめざす機関誌創刊の準備は、著々と進められています。タイトルは、ニューズレターNO.1でお知らせした4つの案の中から「家族社会学研究」(Japanese Journal of Family Sociology)に選ばれました。印刷形式はなお検討中ですが、B5版横組、1ページ当り約40字×40行、110ページ程度のものになりそうです。当初考えていた、

た場合は、執筆者に経費の実費負担を求めることができる。

- 9 投稿しようとする者は、編集委員会事務局に原稿（3部）を送付するものとする。
- 10 投稿の締切は毎年1月末日とする。
- 11 本誌の編集事務局は当分の間早稲田大学文学部社会学研究室内家族社会学セミナー事務局に置く。

「執筆要綱」（案）

- 1 本誌に発表する論文等は、いずれも他に未発表のものに限る。
- 2 論文は、図表分を含めて16,000字（400字詰原稿用紙40枚）以内とする。図表は1葉800字に換算し、5葉以内とする。
- 3 論文には、欧文タイトルおよび200語以内の欧文要約を貼付するものとする。
- 4 書評は、編集委員会からの依頼原稿とし、3,200字（8枚）内外とする。
- 5 研究ノートその他には、研究上の問題提起、内外の動向紹介、研究プロジェクトの経過報告、他の著者への批判・反論等を含み、8000字（20枚）以内とする。
- 6 執筆上の細目については、別途定める「執筆ガイド」に従うものとする（投稿希望者に、事務局から随時配付する）。

事務局からのお詫びとお願ひ

- 1 これまでに会費を現金にてお納めいただいた方の領収書の但しがきに、「昭和64年度会費」とありますのは、「昭和63年度」の誤りです。お詫びして訂正いたします。なお、現在徴収中の会費は、すべて昭和63年度のものです。
- 2 郵便局および銀行振込で会費を納入される場合は、事務局からの領収書の発行は省略し、振込控えを領収書に代替させていただきます。
- 3 1988（昭和63）年度会費を未納の方

は、同封の振込用紙をご利用の上、至急お納め下さい。振込用紙が同封してある方は、本ニューズレター発送時での未納者です。

- 4 前回ニューズレターでお願いしました業績リストの提出（昭和63年12月20日締切）状況はかばかしくありません。ご面倒ですが、よろしくご協力をお願い致します。
- 5 機関誌、会員名簿および業績表は第22回家族社会学セミナー大会の会場で配付致します。なお、セミナーに参加されない会員（会費納入者に限る）には大会終了後に別途お送り致します。

フォーラム

— 会員投稿欄 —

第21回家族社会学セミナーに参加して
— 家族社会学の課題 —

平岡佐智子（郡立大学院生）

第21回家族社会学セミナーに参加して、今後の家族社会学の課題は次のような事柄ではないかと改めて考えた。第一に、「家族の多様化」と言われるけれども、このような家族をめぐる状況の変化やその背景となる社会的な動きについても分析的に社会学的説明を試みていく研究が必要であるということ。第二には、「家族の近代化」をめぐる議論がなされたが、戦後家族社会学が近代化の要請にとらわれすぎていたことを反省して、すなわち近代化を相対化した上で、近代家族とは何か・何だったのかについて改めて把握し直す理論的研究が急務だといえるだろう。第三には、伝統vs.近代という枠組みにとらわれないで、家族をめぐる個別の状況変化を社会変動論に結びつけていく研究の積み重ねが求められているということである。これがなされてこそ、総体としての家族変動が論じられるのであり、それはとりもなおさず、第一に指摘した課題と重なるのである。

以上の点について各々、セミナーでの議論の行方を追いながら論じられるべき

だが、ここでは紙幅の関係上、第一の点に関してのみ具体的な提案を少々確認してみたい。

総括セッションにはいる前に野々山先生から重要な発言があった。「家族は多様化したのだ」と確認しようという主旨である。確かに第1セッションに始まり全セッションを通じて家族の多様化についての議論は繰り返されていた。しかし、その議論の集約の一端が「家族は多様化したのだ」という確認となり、家族をめぐる内外の状況が様々な変化をとげているという認識を改めてなぞるにとどまるならば、何ら議論の前進にはつながらないだろう。このような確認をする真の意義は、何故このような状況の変化や社会の変動が進むのかを考察するための第一歩となるという点にある。結局、家族の何が多様化したのか、あるいは制度としての家族または結婚家族に代るものが登場して、しかもそれらにはいろいろなありようがあるというならば、何が多様化したといえるのか。残念ながら、これらを説明する手がかりを得たとはいえないのではないだろうか。

その方向で考えいく場合に重要だと思われたのは次の2つの提案だったと思う。一つは、総括で正岡先生が指摘され、同時に笹井先生が述べられた点である。すなわち、(家族の)多様化と言われるけども、一方で画一化現象が起こっているのではないかとことである。それは、住の生き方についてみた場合と全くバラレルに捉えられることだとされた。一見矛盾しているようではあるけれども、確かに多様化で説明される部分と画一化で説明される部分とがあり、そうなる機軸の分析が必要だといえる。この視点を取り込んだ形で議論を進めるべきだと考える。

もう一つは、やはり総括セッションの討論で目黒先生が提案された点である。今まで多様な形態について並列的に論じられてきていたが、もう少し時間の幅の視点をいれて考察すべきだというものがある。いわゆる「多様化」議論の中で、論議の提案や分類の試みの披露などはいくつかなされたが、それらもこの視点が

活かされない限り、少しも生産的ではないのである。そして、その視点にたつて、さらに意味の変容過程に着目することが必要であろう。例えば、従来は逸脱としてみられていたものを対案提示として受け入れようになる社会意識の萌芽であるとか、多様な家族を受け入れる社会のキャパシティについての社会意識の変化などを繰り返した議論がされねばならない。

ところで、第21回家族社会学セミナーの課題の設定としては、「いま、家族に何が起こっているのか」という大きなテーマに迫るべく、まず「家族と外部体系との関連」からその端緒を開くというものであった。私たちがいま共有すべき枠組みの一つを言うとするれば、人が一生のうちでどういう社会関係を取り結んでいくかという観点をもって、その編成された関係のなかで家族という契機がどう機能するかという枠組みをもつことなのではないだろうか。この観点からすると、家族として誰とどういう関係を結ぶかということ、いわば家族の内部が焦点となってくる。だから、現代においては家族と外部体系とのトランザクションを追究することは、すなわち家族の内部の研究に連なるのだ。実はいま述べた枠組みをもってこそ、今回のサブテーマである「家族と内部体系」が現代的課題として重要性をもってくるのではなかったか、というのが私見である。今回議論され得なかった点をもう一度照し返すためにも、第22回家族社会学セミナーでの議論に期待して参加していきたい。

新入会員紹介